

3. 「大坂城」について

(1) 豊臣秀吉が「大坂城」を築城

・石山合戦終結後、大坂の地は織田信長の命令で丹羽長秀に預けられ、四国攻めの際には信澄が布陣していたが、この信澄が”本能寺の変”で討死した後、清州会議によって大坂の地は池田恒興に与えられた。

・もともと織田信長は、石山本願寺のあった地を要害堅固で交通の要衝として、その立地を高く評価し、大きな城を築く考えであった。(『信長公記』)

信長と同じ思いであった豊臣秀吉は、天正11年(1583)4月の”賤ヶ岳合戦”で柴田勝家を破った後、池田恒興を大垣城に移して大坂を掌握し、同年9月から30余国に命じて大坂城の築城を開始した。日夜3万人の人力を使い、毎日千艘以上の石船が入津したとされる。その結果、天正13年には天守が竣工し、引き続いて翌14年正月からは二の丸工事に着手して天正16年(1588)3月にはその工事も完了し、外堀までを含めた城郭が出現した。

『信長公記』

「扱 大坂は日本一之境地也 其仔細は奈良・京都程近く 殊更淀・鳥羽より大坂城戸口まで舟の通りし直にして 仕法に節所を抱く 北は賀茂川・白川・桂川・淀川・宇治川の大河の流 幾重共なく二里三里之内 中津川・吹田川・江口川・神崎川引廻し 東南ハ上かだ嵩 立田山・生駒山・飯盛山之連山の景色を見送 麓は道明寺川・大和川の流に新ひらき淵 立田之谷水流合 大坂の腰まで三里四里の間 江と川とつづいて渺々(ビョウビョウ)と引まはし 西は蒼海漫々として日本地ハ不及申 唐土・高麗・南蛮之船海上に出入 五畿間七道集之売買利潤富貴之湊也」

・耶蘇会宣教師・フロイスの報告には、「秀吉、天正11年より日夜3万の人力を使役し、工事の進むに従い、之を2倍にし、3年以上を費して大坂城を完成したり」

「城壁は頗る高大にして、悉く石を以て畳めり。就役の人力多数なるを以て、組頭は各々担任の部分定め、多数の人力は夜間溝渠に湧出する水を汲むに勞せり。大坂には石なし、何所よりかかる大小各種の石を運び来るや驚く可し。近隣諸侯は、秀吉の命により、石塊を満載せる船舶をおくり、堺一市すら之が為に毎日200艘の石船を出帆せしめざる可からず。……是等の石を置くには甚大なる注意を要し、若し一石にても其位置を誤るときは、身首處を異にす可し。又工事の督促法として、諸侯若し其配下の人力に於て不足するか、或いは工事に怠慢なる時は直に放逐の厳命を被り、所領を没収せらる。

矢倉及び城壁は其高大なると瓦に金箔を施せるとにより、遠距離より望見し得べく。此外城内に著名の建築物多し。」とその工事の様子を記している。

・大坂城は本丸・山里丸・二の丸・三ノ丸の4大曲輪で構成され、本丸の殆んど中央に壮麗なる天守閣が聳え、その南に殿館があって、本丸の追手として桜門が設けてあった。

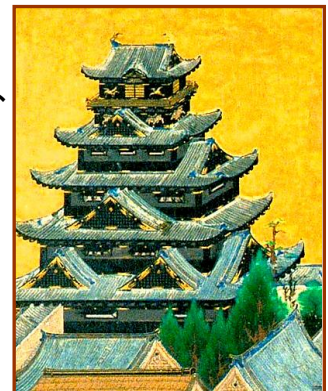
殿館には、慶長元年に明からの使節を迎えるための千畳敷が造られた。

山里丸は本丸の北にあり、極楽橋を通じて二の丸に出た。二の丸の西部にある一廓を西の丸と呼ばれた。三の丸には、追手口(西南)、京橋口(西北)、玉造口(東南)を以て通じており、各口の外にそれぞれ馬出曲輪が造られた。また、北東角の堀外には半円錐状の帯曲輪があり、これら4つの外曲輪が対峙して四隅に張り出し、二の丸四面の固めとされた。

周囲の堀は、南西及び西面南部は空堀で、西面北部及び北東両面は水入りであった。

・豊臣秀吉が築いた大坂城は、慶長19年(1614)の”大坂冬の陣”における講和条件として惣構、三の丸、二の丸が破却され、本丸と内堀のみを残す形となり、翌年の”大坂夏の陣”によって落城し、天守も焼失したため詳しい状況は判っていないが、最初の天守は現在より東の場所にあったとされている。

天守は5重6階地下2階(8層)であったとされ、5階には、黄金の茶室があったといわれている。また、勾欄の上には鶴、下には寅の金の彫物がはめられ、鯨瓦や飾り瓦、軒丸瓦、軒平瓦などにも黄金がふんだんに用いられており、桐紋入の金箔瓦も発掘されている。



(2) 豊臣時代の大坂城下町

- ・大坂城築城にあわせて町造りも行なわれている。

まず、城から四天王寺に向けて南北に伸びる谷町筋と上町筋(東平野町筋)に挟まれた2条の道筋に奥行20間の町屋が並ぶ両側町(上汐町と南北の平野町)が形成され、東西方向には、島町通り(高麗橋通り)に同じ両側町が造られたとみられている。

島町通りの南側にあたる釣鐘町、船越町、内平野町、内淡路町、大手通りについては奥行15間と狭くなっている。大坂城二の丸工事の着手に伴い職・商人達が移住してきたことで居住空間を増やすため少し遅れて開発されたものと考えられる。

なお、これより南の糸屋町以南は、元和5年以降に伏見町人が移住してきたことにより、再開発された町並みである。

- ・天正13年(1585)には秀吉の命により東横堀川が開削され、文禄3年(1594)には空堀の工事に着手して、北は大川、西は東横堀川、南は空堀、東は猫間川に囲まれた大坂城外側の防御ライン、いわゆる”惣構”(現在の大阪城の約4倍の広さ)が形造られる。そして慶長3年(1598)には、その内側に三の丸の工事が始まり、大名屋敷が集められたため、その場所にあった町家は東横堀川西側に開発された船場地区へ強制移転させられた。

*豊臣期の大坂城下町(復元図)

